

立命電友会

新しい技術を生み出す 喜びと苦悩を体験して

安江 弘雄
(昭和三十六年卒)

立命館大学学窓を離れて四十七年が過ぎました。現在は総合病院の電気主任技術者として電気設備の管理に従事する日々を過ごしております。

去る四月下旬、三十六年卒業生同窓会の席で、恩師の浦山隆先生から立命電友会会報への投稿を勧められ、「自分の貴重な体験が校友や後輩の皆さんに役立つことがあれば幸いである」との認識から



これをお受けしました。

私は大学卒業と同時に中部電力(株)に入社して三十数年間、種々の部門で業務に従事した後自ら志望して溶融炭酸塩形燃料電池(以下MFCと記す)の開発に取り組みことを決意しました。そして平成五年に全国の電力会社が「溶融炭酸塩型燃料電池発電システム技術研究組合(以下MFCFC研究組合と記す)」に参画したのを機に、中部電力(株)から本研究組合に出向し、国家プロジェクトとしてのMFCFC開発が終了した平成十七年までの十二年間、研究開発のマネージメントを担当しました。MFCFCは、炭酸イオンを媒体として水素と酸素の化合により発電するもので、効率でCO2排出量が少なく排熱の有効利用が可

能、使用燃料に制約が無い、設備の維持管理が容易でコンパクトな発電設備、など一般の熱機関に比べて種々の特徴を有しており、地球温暖化防止と省エネルギーの観点から有望な発電システムとして内外の関心を集めてきました。

私が所属したMFCFC研究組合は新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)から委託を受けて活動し、平成十一年には最大出力一〇〇〇kw級発電システムの開発に成功して内外の高い評価を受け注目を集めました。更に平成十二〜十七年においては、実用化を目指した電池の開発に取り組み、その成果は平成十七年に開催された「愛・地球博」において二五〇kw級発電システム二基の構築に反映され、全期間を通して会場消費電力の一部を供給することに成功しました。しかしこれらと並行して開発を進め、更に高度な技術適用を目指した高性能電池に関しては十分な成果を得ることが出来ず、自ら開発の尖兵を自負して取り組んだ責任者の一人として慚愧たる気持ちに陥りました。

私が十二年間にわたって積極的実践したことは、一、課題の解決に際しては常に原点に立ち返って対応 二、個別研究員の考え方を尊重するとともに、研究組合を中心とした総合力を発揮するようコーディネートに尽力 三、若い

研究員に対しては、大きなプロジェクトの中で自分が担当している業務の意義と重要性を自覚させ、多様な課題解決方を模索させる努力 四、専門外の知識と情報を相互に提供・共有し、開発成果の付加価値を高める努力などです。

それにもかかわらず、高性能電池の最重要開発課題である「性能」が最終目標を達成できなかった理由は 一、すでに実績が確認されている幅広い関連技術の活用が不十分であった 二、電池構成部材の加工技術などで全く未経験の分野があり、研究開発と製作技術開発のミスマッチが生じたなど詰めの甘さが起因していたと認識しています。

技術開発においては常に新しい課題に遭遇し、その内容も高度化を続けますが、過去に蓄積された貴重な技術情報を企業秘密に抵触しない範囲で積極的に活用するとともに、特に企業化を前提とした開発においては、周辺技術についても万全を期して対応することが不可欠であると考えます。

わが国は、ちょうど私達がそれぞれの分野の最前線に立って活動した昭和三十〜六十年代に、産学官連係のもとに優秀な研究者や技術者が積極的な開発活動を展開し、技術立国として資源が乏しいという弱点をカバーしながら世界をリードしてきました。しかし近年、欧

米はもろろんアジア各国の技術力の向上などによって、わが国の技術基盤が非常に脆弱な状況になっています。

加えて昨今においては、地球温暖化要因であるCO2の排出と、石油価格の高騰による不安定なエネルギー事情は世界を不安に陥れており、解決の糸口さえ見出せない状況にあると言っても過言ではありません。

エネルギー確保・地球環境保全・発展途上国における食糧危機など、いずれをとっても技術的側面からの対応が不可欠です。

またエネルギー・環境部門以外の技術開発や技術革新についても、私たちが企業人あるいは技術者の一人として、課題の解決に向けて積極的かつ地道な活動が必要であります。

すなわち、わが国が過去に追求して来た技術力の確保と、これに裏打ちされた基盤を更に強化し、かつての技術立国を再構築していただくことを切望いたします。

立命電友会メンバー諸兄には、特に若い技術者や研究者の育成に最大限の努力をお願いし、在校生の皆さんにはわが国の技術力の現状に関心を持ち、勉学など学内外活動を通じて有能な技術者になっていただくよう期待いたします。

新任のご挨拶

電気電子工学科

教授 服藤 憲司

二〇〇八年四月に電気電子工学科に着任致しました。私は東北大学工学部を卒業の後、東北大学大学院での五年間と引き続きポスドク五年間の合わせて十年間を、核融合プラズマ閉じ込め理論の研究に専念しました。その後の約二十年間は、松下電器の研究所で、半導体の研究開発に従事致しました。ここへ着任する直前の二年間は、香川県の高松高専にて、物理の教員をしておりました。

核融合の研究は、当時、二十一世紀の夢のエネルギーとして期待され、実現へ向けての開発は困難を極めるであろうが、しかし必ず達成できる、と優秀な研究者達がしのぎを削っていました。しかし、「完全電離したプラズマを目に見えない磁力線で編んだ容器の中に高密度に閉じ込める」わけですから、様々な不安定性が発生し、プラズマ制御は容易ではありません。その後、核融合実験炉のスケールは大規模化し、そして着実に技術は進展していると聞いております。このような研究に携われたことを幸せに思い、また核融合炉の成功に期待したいところです。

松下電器在職中には、シリコン

をベースにしたDRAMや微細MOSFET、そして窒化ガリウムを用いた青色レーザーの研究開発に携わりました。製造プロセス技術、デバイスの構造提案、そして果てはパッケージング技術まで携わりました。核融合研究が基礎研究であるとする、こちらは、世の中のビジネスや技術動向に振り回される応用研究です。目的がはっきりしていて先導される一方、基礎研究の部分には、なかなか手が届きにくい、というジレンマも良い意味で経験しました。

高松高専は教育が中心で、研究に割ける時間は限られたものでした。クラス担任をしていましたので、一日中、学生と一緒にになって課題解決に奮戦していました。「吾輩は猫である」に出てくる「苦沙弥先生」の姿にあこがれて、という理想論は、なかなか実現難しく、現実的な不合理と葛藤しながら解決の曙光を見出し一時の安堵を得る、ことの繰り返しでした。しかしながら、得難い経験でした。

さて、私の関心は、月並みな表現ですが「エネルギー」と「環境」です。環境にやさしいエネルギーというところ、やはり植物の光合成系でしようか。光合成のメカニズムは、精緻にプログラムされ、また、その分子構造は徐々に明らかにさ

れつつも、まだまだ人知の及ばない部分も多いようです。それに何と云っても、既存の化石燃料を用いる方法に比べて、単位体積当たりのエネルギー発生密度が小さい点が難点ではないかと思えます。

立命館大学への着任を機に、光合成を模倣した光電変換デバイスの実現を目指した研究を始めたいと思っています。直接的には全く未経験の分野であり、またテーマ自体が遠大であるため、限られた時間でどこまでできるのか、正直な気持ちとして不安ではあります。「挑戦する」という気持ちで学生とともに取り組みたいと思っています。

最後になりましたが、みなさま、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

電子情報デザイン学科
助教 福水 洋平

二〇〇八年四月、電子情報デザイン学科に助教として着任いたしました。

私はいわゆるファミコン世代に属しますが、幼少より身近にパソコンがあったため、ゲーム機で遊んだ記憶というのがほとんどありません。書籍や雑誌に掲載されているプログラムリストをパソコンに自分で打ち込み、時にはそれをベースに変更を加えて遊んでいた。当時はそれが特別なこととは思っていませんでしたが、今と

なつてはそれが計算機アーキテクチャに興味を持つようになったきっかけであり、当時の恵まれた境遇に感謝する次第です。また、幸い中学、高校と一貫教育校に学んだため、まとまった時間がとりやすかったこともあり、課外活動としてプログラミングやアマチュア無線、電子工作など工学分野にも意欲的に取り組むことができました。エンジニアを目指すようになったのも自然な流れだったのではないかと今では考えています。

高校を卒業後は、神戸大学工学部情報知能工学科に入学、学部時代はプログラミングに明け暮れておりましたが、学部四回生の研究室配属でかねてより興味を抱いていた半導体業界へ飛び込むことを決め、灌和男先生(現エイ・アイ・エル株式会社社長)の研究室の門をたたきました。ターボ復号器のLSI化に関する研究を経て、一瞬間に千個を超える無線タグを一括で識別する超多重RFIDシステムの研究に関わらせていただきました。単にシステム設計技術やLSI実装技術にとどまらず、タグの無線通信を模倣するためにFPGAでエミュレータを作ったり、ソフトウェアシミュレータを作ったり、アンテナを作るために日曜大工したり、ディスクリー

ト部品で実験するために基板加工機でプリント基板を作ったりと、さまざまな得難い経験をさせてい

いただきました。

神戸大学より学位取得後は東京工業大学統合研究院にソリューション研究員として着任し、一年間という短い期間ではありましたが半田宏先生、益一哉先生をはじめとするプロジェクトで医療バイオ分野の研究に携わっております。ここでは、産業界が必要とする将来的な技術課題に対するソリューションを導き出すという大学としては全く新しい研究体制の下、体内センサネットLSIの研究を進めて参りました。

さて、これまでムーア則に従って突き進んできたLSIの微細化ですが、それも物理限界に近づいており、これからはムーア則を超越した技術開発が求められています。SoCはその核となる技術であり、微細化で得られた集積密度を活かしてどんなシステムを実装するか問われています。本学科には、その推進において他にはない教育研究環境が整っていると考えます。

四月よりはじめて教学に携わることもあり、不慣れではありますが非常に充実した毎日を送っております。立命館大学の発展とこれからの日本のため、微力とはいえ尽力させていただきますので、ご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いいたします。



私が初めて宮崎アニメを見たのは高校一年生の時だ。テレビで放映されていた「天空の城ラピュタ」を見た時に、今までのアニメに対するイメージが一気に払拭された。アニメーションは幼い子供向けに作られたものであり、幼稚で陳腐な物と決め付けていた私はラピュタの世界に圧倒されしばらく感動して止まらなかった。自分も「人が感動する何かを作りたい」と思い、自分には何が出来るか探した。するとその時作曲が趣味だったのだが、ピアノで自作した曲を友人や音楽の先生に聞かせると結構評判が良かった事を思い出した。こういう時は印象派っぽい曲を作ると受けが良い。高校は生徒のほとんどが一般大学に進学する進学校であったが、私は久石譲のような映画音楽を作る作曲家になることを勝手に決意した。音楽の先生も作曲料なら今からでも間に合うといってくれたが、親は「芸大に行くなら金は出さない。」と言った。さすが親は冷静な判断を下す。そんな中、兄が有名大学に合格した。

兄の合格はやはり悔しかった。自分の才能の度合いからも考えてこのまま芸大を目指すのは危険な気がし、音楽ではなく技術開発で人々に感動を与える事を決意した。理工系に進学したいと考えた理由は幾つかある。まず図書館で出会った本である。スピーカーから音が出る仕組みや、電子レンジが物を温める仕組み、コピー機の構造、エアコンの仕組み等、ありとあらゆる電気製品の仕組みを分かりやすくかつ理論的に解説してあった。今まで疑問に思っていた事が次々と分かり、物の仕組みや構造を理解する楽しさを知った。また物事を理論的に追求する癖がある事と、高校の実力テストで数学と物理の成績が良かった事などから、「自分は理系に向いているのでは？」と勘違いしたことが理工系に進んだ理由である。電気製品の中でも特にCD、DVD関連や映像機器が好きだったので、その分野の理解を深めるため光工学科へ進みたいと考えた。

大学の講義は想像以上に難しかった。高校までは明確な「分かった」という感触が得られていたのに、大学の専門科目は漠然とした理解しか得られなかった。予備校の平明な説明に慣れてしまっていて、自力で要約し解釈するという能力の不足が露呈した。また学習している事柄と興味のあるオーディオやDVDなどの分野との関連性をうまく繋げる事が出来ず、いつしか興味が薄れ単位が取れればそれで良いという考えに変わっていた。そして勉強法を再検討する努力をしないまま月日が流れてしまった。「大学生の間はこんなまぬるい雰囲気でも別に良いじゃないか？」と思って貴重な時間を無駄にしている私をから矯正して下さったのは配属研究室の田口耕造先生だ。ブレ卒研として「脈波計測」の研究を行った。光を使って脈波のデータを取り、解析して身体情報を調べるといふものだ。早速実験に使うプログラムを組む事になったのだが、これまでのテスト勉強や提出物などの作成にも友人の力を借りて行ってきた癖が急に抜けるはずも無く、自力で組んでいくことなど出来なかった。

そこでネットや本からそのまま拝借して融合して何とか事を済ました。しかし理解せずに組んでいる事が田口先生に見抜かれてしまい叱責を受けた。一番怖いのはそんないい加減な物を作成して平気で提出できるような自分になってしまったと思う。また「パルスオキシメータ」の技術さえ知らなかった私は、光で脈波データを取るなどという事は出来るはずがないと内心思っていた。出来るはずがないと思いつながら研究をやった良い結果が出るはずは無い。何度やっても「脈波」は取れなかった。こんな出来もしないことを何でやらせるのだろうか？と思いつながら「何度やっても全然できません。」と言ってしまった。見かねた先生が実験をしてみると見事に成功した。コンピュータの画面に表示された脈々と波打つ波形データを見て感動し、私の考えは一瞬にして変わった。先生は何もせずに一度で成功にたどり着いたわけではない。回路を一箇所ごと、少しずついじっては波形をとり、少しいじっては波形を取りを繰り返して成功した。成功にたどり着くまでの先生の後ろ姿をみて「大切なこと」によりやく気付いた。そして努力する事なく三年間を過ごしてきてしまった自分を後悔した。

私は研究を通して「問題の本質を見抜き、現在の自分の実力と照らし合わせて、どのような方法と手順で解決して行くのが最良か」を見極める力、また「理解を積み重ねる事によって作り上げて行く」という力が鍛えられたと感じている。そして一番の収穫は、「これまで絶対と思っていた価値観は、物事を見る視野が狭いために勝手に絶対と勘違いしていただけ」という事に気付けたことだ。田口先生は決して解答を教えてはくれない。自ら考え解決することによって初めて成長できるからだ。この教育方針のもと指導して下さった事に心から感謝している。現在は田口先生の「新規性のある研究を練り上げ続ける力」、そしてそれらを「確実に遂行し論文にまとめ上げていく力」に憧れ、博士課程後期課程に進学し尽力させて頂いている。新規性のある研究を生み出すのは本当に難しい事である。自分とつづく実感している。自分でも、既にどこかで達成されていたり、また到底実現不可能な事柄である事がほとんどである。

立命館大学で学び、成長できた事を心から感謝しています。自分の浅学を恥じ、不器用ながらも自力で行い向上して行くことの必要性を体得する事が出来ました。いつしか立命館大学で学んだ事を生かし、人々が感動するような技術の開発に携われる日が来れば、これ以上の幸せはありません。

第五回総会開催のご報告

昨年より皆様方にご案内いたして、おりました第五回総会が、六月二十一日(土)午後一時四十五分より京都グランビアホテル(於五F古今の間)において、開催されました。

ご参加いただきました校友は一三四名、同伴者二〇名でした。多数の同伴者にご参加いただきましたことは大変に印象的でした。

総会では、本会津田川勝副会長(昭和四十四年卒)の開会宣言に引き続き、本会荒木敏会長(昭和三十四年卒)、電子システム系学系長杉本末雄先生によるご挨拶がありました。そして、議長への自薦がありませんでしたので、事務局提案にて加藤義彦氏(昭和五十五年卒)が満場一致にて選出されました。

事業報告、会計報告が事務局からの説明があった後、本会前田稔夫会計監査(昭和三十年卒)により監査報告がなされ、これらの内容について満場一致にて承認されました。

役員改正では、まず次期会長への自薦が問われましたが残念なが



荒木 敏会長



杉本末雄学系長

ら立候補がありませんでしたので、先の役員会と顧問会にて検討確認されました候補者について事務局よりご紹介と推挙させていただきましたところ満場一致にて承認されました。第五期会長として南能寿氏(昭和四十二年卒)が選出されました。引き続き、第五期役員会メンバーについて、事務局より口頭・文書により提案させていただきましたところ、同様に満場一致にて承認されました。第五期役員一覧を次頁に掲載させていただきますので、お目通しください。

その他の議題において、一、本会の会員規模や本総会への参加者規模を鑑み、本会の枠を超えたもつと社会性を帯びた事業の展開について今後勘案して行くことはできないだろうか、二、役員がいけない年代が多数あり、その選出に会員相互に尽力すべきである、などの貴重なご意見を賜り、次期役員会での検討課題として事務局が引き取ることになりました。

その後、議長解任がなされ、第五期会長に選出されました南氏によるご挨拶がありました。今後の四年間に対する期待に満ちた万丈の拍手に包まれて、本総会は閉会となりました。



南 能寿新会長

総会に引き続き、陰山英男氏による講演会(題目「子供の学力は一年で伸びる」)が開催されました。講演では、まず昨今の児童・生徒・学生の学力低下についての現状諸例とその原因について触れられ、現在文部科学省教育審議会ではその是正に鋭意努めておられることが述べられました。そして、どのような学力レベルにある児童でも(1)早寝・早起き、(2)朝食摂取、(3)繰返しによる記憶、(4)一日一・五〜二時間までのテレビ視聴などの生活様式を六カ月から一年間続けることで、児童の学力は一〇〜一五%は確実にレベルアップすることが述べられました。また、最後に人材発掘と企業経営について触れられ、(1)生活習慣のいい若者を採用する、(2)社員の生活習慣のための時間管理を指導する、(3)社員と家族の幸せを支援する経



陰山英男氏



営をする、(4)事業は最初から国際化を目指す、(5)マスコミニズムからリアリズム思考へ脱却する、(6)時代を読んで経営する、などの提言をされました。陰山氏は、長年にわたる児童の生活様式と学力の独自の観察データを背景にしつつ時にはユーモアを交えながら大変判りやすい講演をされ、聴講者一同、意義深いひと時でした。その後、会場を三F源氏の間に変え、懇親会が開催されました。本会井上和夫顧問(昭和三十三年卒)による挨拶、祝電披露、本会田中寿雄幹事(昭和三十五年卒)による乾杯発声を経て、交友相互の親睦を深める会席となりました。そして意気揚々とした雰囲気の中、最後に恒例の校歌斉唱を行い、懇親会は閉会となりました。





新役員紹介

会長

南 能寿 (昭和四十二年卒)

副会長

島津 良昭 (昭和三十五年卒)

田中 寿雄 (昭和三十五年卒)

山下 正之 (昭和四十一年卒)

瀬見 英利 (昭和四十四年卒)

顧問

辻村 寛 (昭和二十八年卒・元教員)



会計幹事

前田 稔夫 (昭和三十年卒・元教員)

横井 猛彦 (昭和五十九年卒)

事業幹事

堤 誠 (昭和三十六年卒)

津田川 勝 (昭和四十四年卒・教員)

加藤 義彦 (昭和五十五年卒)

中西 恒彦 (昭和四十一年卒・教員)

田口 耕造 (平成三年卒・教員)

高山 茂 (昭和五十九年卒・教員)

津田 見眞 (昭和四十四年卒・教員)

森岡 泰雄 (平成四年卒)

川畑 良尚 (平成六年卒・教員)

久保 幸弘 (平成九年卒・教員)

小松 康廣 (教員)

今井 茂 (教員)

幹事

小山 仁平 (昭和二十五年卒)

清水 謙士 (昭和二十五年卒)

樋口 昌利 (昭和三十年卒)

西村 明男 (昭和三十一年卒)

金森 徳雄 (昭和三十一年卒)

奥村 隆昭 (昭和三十一年卒)

小松 明 (昭和三十一年卒)

松井 新三 (昭和三十一年卒)

稲越 二郎 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

教員幹事

荒木 努 (昭和四十四年卒)

泉 知論 (昭和四十四年卒)

浮田 宏生 (昭和四十四年卒)

小倉 武 (昭和四十四年卒)

小野 雄三 (昭和四十四年卒)

笠原 健一 (昭和四十四年卒)

亀井 且有 (昭和五十三年卒)

北川 晃 (昭和五十三年卒)

北澤 敏秀 (昭和五十三年卒)

齊藤 茂 (昭和五十三年卒)

左貝 潤一 (昭和五十三年卒)

杉本 末雄 (昭和五十三年卒)

高倉 秀行 (昭和五十三年卒)

道関 隆国 (昭和五十三年卒)

寺井 秀一 (昭和五十三年卒)

名西 徳之 (昭和五十三年卒)

西門 秀人 (平成七年卒)

沼居 貴陽 (平成七年卒)

服藤 憲司 (平成七年卒)

福井 正博 (平成七年卒)

福水 洋平 (平成七年卒)

藤枝 一郎 (平成七年卒)

藤田 智弘 (平成七年卒)

藤野 毅 (平成七年卒)

峯元 高志 (平成十三年院卒)

森本 朗裕 (平成十三年院卒)

山内 寛紀 (平成十三年院卒)

山崎 勝弘 (平成十三年院卒)

山田 廣成 (平成十三年院卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

岩永 英良 (昭和三十三年卒)

「立命電友会九州・
沖繩支部」の総会・
懇親会開催

六月十四日(土)に、平成二十年
年度の「立命電友会九州・沖繩支
部」の総会・懇親会を、福岡の中
心にある天神のイムズビル十二階
のレストラン「KIRIN S O
W I S O W」で開催しました。

第八回目を迎えた今回の総会、
懇親会には、辻村寛先生(二十八
年卒業)に特別参加を、また学園
の津田川勝先生(四十四年)、電
友会の荒木敏会長(三十四年)、
杉本幸生(五十六年)役員に参加
していただきました。例年実施し
ていた施設見学は中止し、学園や
参加者各位の近況などの思い出に
花を咲かせました。

辻村先生から、「電気工学科と
共に歩む半世紀」―師の教え・
同僚との交わりを中心に―と題
した冊子を手渡されました。冊子
には、先生の学生時代、大学の助



関東立電会開催

十三年)、井上勉(四十八年)、岡
部千年(五十二年)、一番ヶ瀬幸
男(五十六年)の皆様と森下(四
十四年)の十六名でした。来年は
より多くの皆様に参加していただ
けることを祈念しつつ本年の報告
とさせていただきます。

昨年(二〇〇八年七月四日(金))十八
時三十分から、関東立電会(関東
地区在住の電気OB会)を東京品
川の日立金属和彊館で開催しまし
た。

寂しい状況でした。松田会長(三
十二年卒)から来年は、今年の出
席者が知り合いを必ず誘うよう
にしようと言うお話がありました。
今年には先輩、会員諸氏のお蔭で、
二十六名の出席があり、会計も黒
字を計上できました。また、今年
入社した会員をはじめとして若い
上りも多参加して頂き大いに盛り
上がりました。

第一回は、米澤先輩(三十六年
卒)の司会で始まり、松田会長の
開会のご挨拶、毎回出席を頂いて
いる荒木前電友会会長(三十四年
卒)、南電友会会長(四十二年卒)
のご挨拶を頂きました。

学園からは高山教授(五十九年
卒、電気電子工学科)から、立命
館学園が隆々と発展している様と
最近話題になっている事の近況報
告を受け、池田先輩(S三十二年)
の音頭で乾杯。

第二回は、「桂都丸師匠」(立命
大・落研OB)に「一人の心をつか



む話し方」という演題で講演をお
願いしました。

開口一番、「こころをつかむと
いう方法はありません。それは、
友達になることです」とガツン。
桂都丸師匠のお話を全部ご紹介す
ることは出来ませんが、印象に残
ったのは、

・「師匠には一切口答えをしない。
口答えをしたら、弟子になってく
れと頼んだ覚えはない」
・「いろいろな仕事や態度が不自
然さを感じさせないようにするま
で修行(形も心も)する」
・「いつも、話を聞いている人が
次に何を期待しているかの気遣い
が大切」

都丸師匠のお話は学生時代のエ
ピソードから始まり、修行の事、
「高座」の由来、上方落語と江戸
の落語の発祥の違い、酔っ払いの
小話、猿の小話、セレブの小話等、
あっといいう間で、気がついた時は
新幹線の間が迫り、一本締めを

して、お開きとしました。ちなみ
に都丸師匠は着物の色も立命館カ
ラーにする等気配りをして頂きま
した。

狭い急ごしらえの狭い高座で、
本当に不便をお掛けしましたが、
これが、却って高座を身近にし、
迫力が感じられました。桂都丸師
匠本当に有難うございました。
今日の報告と来年の関東立電会
の開催は君が主体でやって頂けな
いかとの米澤先輩からの依頼があ
りました。何も言わずに「はい」
と返事をするしかなかったです。ね
今日の高座の話を聴き、私がこの
記事を書くのと、面白くもなんと
ないといわれるのが落ちを覚悟で
紹介しました。お開きの後、荒木
前会長、南会長とJR品川駅辺り
でゆっくりしようと思いましたが
が、週末の賑わいでどこもかしこ
も満員、……

長渡 信昭(四十二年) 記



辻村・前田・浦山研究室
定例同窓会報告

平成二十年六月二十一日(土)、「ホテルグランヴィア京都」にて定例同窓会を開催しました。今年度は、電友会総会と開催時期が重なることから、幹事会で検討の結果、完全コラボレーション(同日・同フロア・同会場)し、立命電友会総会を含め三部構成での開催となりました。第一部では、辻村寛先生、前田稔夫先生、浦山隆先生を含め総勢三十六名が参加いたしました。小川弘之氏(S五十五卒)の司会の下、定例の議案を早々に片付け、辻村先生のご挨拶、前田先生の御発声で乾杯を行い、長い同窓会の幕が落ちて落とされました。懐かしい話や近況報告など話が盛り上がる中、あっという間に中締め。一同、記念写真を撮影後、第二部電友会総会へ。総会後の懇親会では、さらに懐かしい諸先生方、電友会のメンバーの方々と大いに盛り上がりました。

また、ラストを飾る第三部では、他の研究室の方も交え二十名を超える参加となり、尽きない話題に次々と話の花が咲き乱れました。今年で、非常勤講師をおやめになられた、前田先生に感謝と慰労の会も兼ねた同窓会は、十時間にも

及びましたが、無事終了いたしました。(前田先生には、記念品として旅行券を贈呈致しました。)ご参加いただきました皆様、お疲れ様でした。次回もより多くの方に参加し、本会を盛り上げていただきますようお願い申し上げます。(昭和五十九年卒 藤山 志伸)



同窓会だより

昭和三十六年卒同窓会

電気工学科昭和三十六年卒業生同窓会を、平成二十年四月二十一日の二日間長野県南木曾町「ホテル富貴の森」にて開催しました。

今回は三年ぶりの開催となりましたが、浦山先生をお招きし十八名の学友が参加しました。お互い古希を迎えて健康で参加できたことを喜び、学生時代や恩師・旧友の消息などに思いを馳せるなどして深夜まで語り合いました。翌日はまぶしいほどの陽光を浴びながら、木々が芽吹いた野山に囲まれた妻籠宿と馬籠宿を散策して、同窓会を一層楽しいものになりました。次回を明年秋に仙台で開催することとし、お互いの健康を祈りながら再会を約して別れました。(幹事 安江記)



計報

卒年	氏名	3年前
昭和7年	紀田彦二郎	
昭和11年	廣瀬 恒雄	
昭和15年	大島 弘	
昭和15年	木下 喜一	平成16年3月29日
昭和15年	谷利 精造	平成19年7月
昭和16年	池田 政治	平成19年11月
昭和18年	伊庭 二郎	平成20年3月5日
昭和19年	北島 明	平成11年3月
昭和24年	山原 敬	
昭和25年	小堀 貞男	
昭和25年	水野他家三	平成20年2月2日
昭和25年	土肥 繁義	平成19年3月28日
昭和29年	糸井 弘二	平成19年1月13日
昭和29年	草川 三郎	平成19年11月9日
昭和30年	吉川 博	平成13年7月4日
昭和31年	藤本 義昭	平成20年3月6日
昭和32年	橋本 勝	平成18年
昭和39年	東 紘一郎	平成20年5月19日
昭和41年	山中利喜蔵	平成20年2月17日
昭和41年	山村 紀夫	平成19年12月19日
昭和44年	窪田 元	平成19年



事務局便り

立命電友会会報三十二号の発行にあたり、ご寄稿いただいた皆様にたいし、心よりお礼申し上げます。第五回立命電友会総会にはたくさんの方々にご参加いただき有り難うございました。お陰様で大盛会に終えることができ大変嬉しく思っております。

先日、ずっと会いたかった友達に二十数年ぶりで会うことが出来ました。会ったとたん思わず涙がこぼれ、話が尽きることなく、とてもいい時間を過ごしました。立命電友会では同窓会のお手伝いもさせて頂いております。皆さんも素敵な時間を過ごしてみませんか。住所変更等がございますら、ご連絡お待ちしております。宜しくお願いします。(宮林)

立命電友会連絡先
〒五二五-八五七七
滋賀県草津市野路東一丁目
立命館大学理工学部電子システム系内
立命電友会事務局 高山 茂
宮林(月・木)
電話 〇七七(五六)二六六二
FAX 〇七七(五六)二六六三
E-mail: denyukai@ml.ritsumei.ac.jp
http://www.ritsumei.ac.jp/se/re/denyukai/
(会報の題字は久保之俊氏)